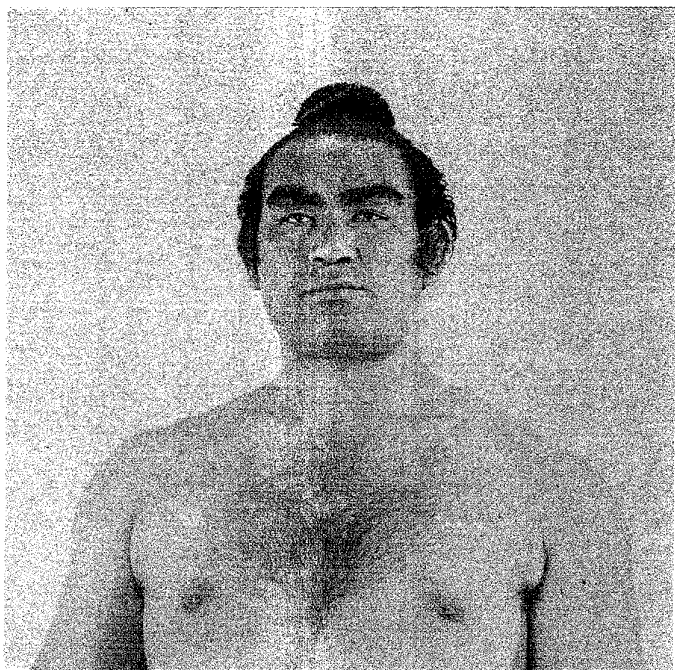


II 奄美が生んだ横綱「朝潮 太郎」

朝潮太郎（本名 米川文敏）は昭和四年（一九二九年）、今の^{おおしまぐんとくのしまちやういのかわ}大島郡徳之島町井之川に生まれました。奄美の豊かな自然の中で、わんぱく時代をのびのびと過ごし、昔からすもうがさかな奄美でみとめられた米川文敏は、大ずもうの力士（すもう取り）への道を選んで、人一倍努力しました。その結果、第四十六代横綱「朝潮太郎」となり、その名は日本中に広く知られました。

文敏は、十四歳のころには、体かくのよい、うでの力と足こしの強い少年に成長していました。すもうの強い先ばいたちと日がくれてもけいこをがんばりました。あるとき、応えんしていた老人に、「文敏、つかまえて投げんか。」と大声で気合いを入れられると、す早く先ばいのむねにしがみつき、そのまま土ひょうの外に投げ飛ばしました。その力強さに集落の人々は目を丸くしました。

文敏は、十七歳のわかさで、大島郡すもう大会に徳之島町代表選手として出場することになりました。相手をつつ



ぱって寄りたおすなど、ごう快な勝ちっぷりで人々をおどろかせました。特に、この大会後引たいするアマチュア横綱は、「文敏君の将来に期待し、わたしのまわしを記念としておくる。」と文敏を土ひょうにあげてみんなの前でげきれいしました。記念のまわしを自分の手にした文敏はたいへん感げきして、

(おれを生かす道はこれだ) と強く思うようになり、

「お父さん、ぼくは東京へ行って、すもう取りになりたい。東京に行かせてください。」と、父にお願いしました。父は、

「すもう取りになるのは反対だ。徳之島でちよつと強いと思つて、うぬばれるんじゃない。それに、東京へはかん単に行けるものではないぞ。」

と、ゆるしてくれませんでした。

その当時の奄美群島は、アメリカ軍の政権下にあつたので、自由に鹿児島市や東京などへは往來できませんでした。それでも、文敏は、東京に行きたくてたまりませんでした。

ちよつどそのとき、親せきで元明治大学すもう部主将の大澤さんが帰っていました。文敏は大澤さんに相談したところ、大澤さんはその体かくと意気込みをみとめ、すもう取りになるようにはげましてくれました。そこで、文敏は、また両親にゆるしを得るためにお願いにいきました。

文敏は、父の前にすわると、

「ぼくの体を生かすにはすもうが一番だと思います。大澤さんも『きみがすもう取りとしてどれだけ力があるのか、大ずもうにちょう戦したら。』と、すすめてくれました。ぼくを、東京に行かせてください。大ずもうをとらせてください。お願いします。」

文敏少年は、やる気まんまんて父親にお願いしました。

「文敏、おまえは横綱にでもなれると思っっているのか。」

という父のことばに、

「なりたいです。ぼくは、大ずもうの横綱になろうと思っています。」

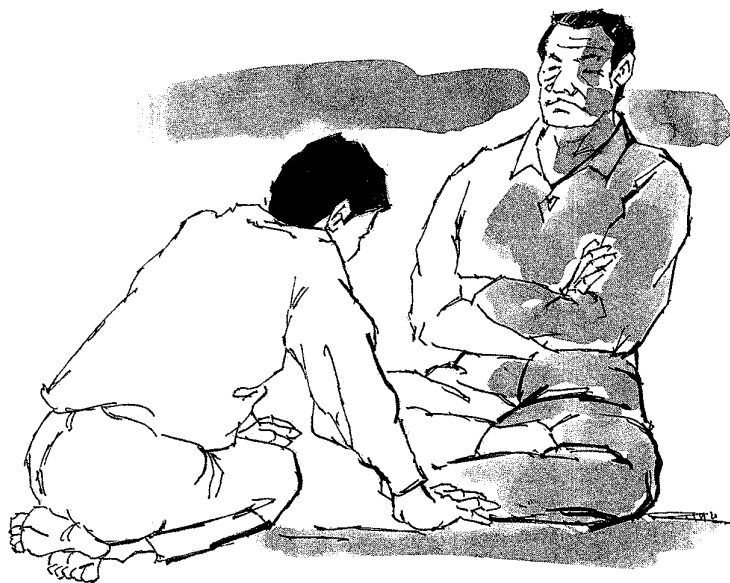
と、はっきり答えました。父は、しばらく考えていましたが、

「おまえはすもう取りになりたいというが、そんなあまい世界ではない。そう簡単にはゆるすわけにはいかない。」

文敏はがつくりうなだれて父の部屋を出ました。

「まだまだ、ぼくはあきらめないぞ。」

文敏は父に反対されればされるほど、大ずもうの横綱になってみたいという意よくが、ますますわいてきました。明けてもくれてもお願いする文敏の熱意に、父もとうとう折れて、



「文敏、おまえがそれほどまでもすもう取りになりたいなら、東京へ行け。やる以上は関取せきとりになるまでは帰ってくるな。」

この父のことばに、文敏は、

（よし、やったぞ。がんばるぞ！）と、固く心にちかいました。

出発する日、母親は文敏の旅立ちを祝って、赤飯せきはんをたいてくれました。文敏は自分にとって、この旅立ちには横綱を目ざして前進あるのみで、弱音よわねをはいて徳之島に帰ってくるなどできないと、強く心にちかいました。

文敏は東京に着き、高砂たかさこ部屋に入門しました。朝五時に起き、部屋へやや道場のそうじ、けいこなどすもう取りとしてのきびしい生活が始まりました。

「文敏、今度はおまえの番だ。むかってこい。」

文敏は先ぱいのむねに元気よく飛び込んで行きましたが、まわしもとれないうちにかん単に投げられてしまいました。

「出足がおそい。」

「こしが高い。」

など、なんどもなんども気合いを入れられ、全身どろまみれになりながら、くる日もくる日もき

たえられました。きびしいけいこにたえられず、にげ出す人もいました。

文敏は、どんなに苦しいけいこでも、にげ出すわけにはいきませんでした。

「もういっちょう、お願いします。」

と、夢ゆめにむかって、歯をくいしばって、何度も何度もぶつかっていききました。やがて、体がまったく動かなくなりしました。

「文敏、起きろ。泣くな、まだまだけいこが足りないぞ。」

ぐったりして、目はうつろで、師匠ししょうの言葉も聞こえないぐらいでした。それでも、気力をふりしぼって向かっていきました。こうして、すもう取り「朝潮」がたん生したのです。

その後も努力を続けて、関脇せきわけとなった朝潮は、昭和三十年三月の大阪場所、十二勝三敗で初優勝しました。さらに、わざをみがき、大関となった朝潮は、昭和三十四年の大阪場所で、第四十六代横綱になり、とうとう夢を果たすことができました。朝潮の六回のゆう勝がいずれも大阪場所だったので、ファンの人々がえんぎをかついで「大阪太郎」と名づけて、土ひょうにあがると大きな声えんをおくりました。

引たい後も、高砂親方たかさごおやかたとして、高見山たかみやま・小錦こにしきなどの人気力士を育て、大ずもうを世界に広めたことも大きなこうせきとして残るでしょう。